

友達の意見を聞き、自分の考えと比べて伝え合う授業

第1学年 実践記録

平成25年9月26日(木) 5限 峯島 貴乃

1 単元名 教材「ゆうだち」(全8時間)

2 本時の計画 (5/8時間目)

(1) ねらい

けんかしていた二人の登場人物が仲直りしたのはどこか探し、そう思う理由を互いに伝え合うことができる。

(2) 本時の構想

「ゆうだち」は、うさぎのことたぬきのこの仲直りの様子について書かれてあり、1年生の子どもたちにとって身近なテーマの教材である。昨日けんかをして分かれた二匹は、偶然同じ木の下で雨宿りをするようになるが、気まずい雰囲気のまま時間が過ぎる。そのうちどンドン雨が激しくなり突然の雷に、二匹は思わずびったりと寄り添う。雨が上がった頃にはいつの間にか二匹の心は晴れていて、手をつないで走りだす。本時では二匹が仲直りしたのはどこかを考え、なぜそこだと思ったのか理由をノートに書かせ、互いに考えを伝え合う。

3 本時の展開 (5/6時間)

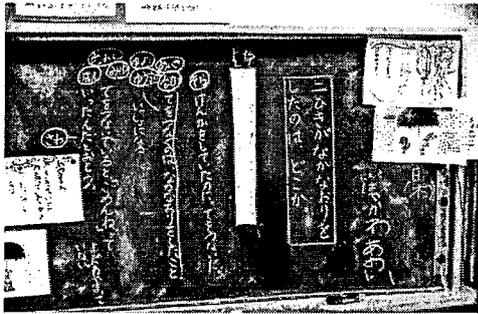
時間	教師の働きかけと予想される児童の反応	◇支援 ・留意点 ◎評価
7	1 本時の学習のめあてをつかむ。音読する。 二匹が仲直りしたのはどこか。	<ul style="list-style-type: none"> ・2つに分かれて段落読みをする。 ・前時の振り返りを行う。 ・2つの挿絵を黒板に貼る。
8	2 自分の考えと理由を書く。 A: にひきは、びったりよりそっていました。 B: にひきは、木のしたからとびだすと、てをつないではしりだしました。	<ul style="list-style-type: none"> ◇教科書に傍線を引かせる。 ◇自分が選んだ場所にネームプレートを貼る。 ◇ノートに書く文型を示す。 (○ページ○行目, 理由)
5	3 隣、前後の人とノートを見せ合い、意見交換する。	
15	4 全体で伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> ◇同じ意見→似ている意見→質問や反論の流れで進める。 ◇挿絵の吹き出しに、二人の心情などについて子どもたちから出てきた意見を書いていく。
10	5 授業を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ◎A 友達の意見を聞いて思ったことや分かったことについて書ける。 B 授業で思ったことや分かったことについて書ける。

4 考察

(1) 成果

○「自分の考えをもつ」における児童の様子

1学期の実践では、友達の影響を受けて何度も意見を変えてしまう姿が多く見られたので、2学期は伝え合いの前に、ノートに自分の意見をしっかりと書かせる時間を確保し、全員に発表させるようにした。全員の意見を聞いてから質問や意見につなげるかたちは、一人一人が1回は意見を話す場が保障される。また、板書に全ての友達の意見が残っているので、それを手がかりに話し合うことができる。



ノートに花丸やコメントを書いたり、黒板に話すスキルを示したりすることで、考えをもつことにも発表することにもだんだん自信ができてきた。また、他の友達が気づかないところに目を向けたり、自分の考えにこだわりをもって説明したりしている子への賞賛を継続して行ってきたところ、簡単に自分の意見を変えないなどの変化が見られるようになってきた。



○「伝え合い」における児童の様子

これまでは、友達の意見を聞き、それを受けて話し合いをするのが難しかった。担任が相づちを打ったり、一人の意見をとり上げ、全体に問いかけたりすることで友達の意見を注意して聞くようにした。また、板書に子どもの意見を書きとめておくことで、いつでも友達の考えを確認できるようにした。

今回は、伝え合いの中で友達の発表に対する感想も見られ、少しずつではあるが意見交流の質が向上してきた。



(2) 課題

○「発問」と「展開」について

本時では、「二人が仲直りをしたのはどこですか。」の発問に対して、「根拠」を本文に求め、「理由」を明確にするという活動を展開したが、指導者からのアドバイスでは、この教材でこのような場面切り取り型の「分析批評」的な読み取りは、1年生にとって難しいということであった。本時で子どもたちは、挿絵からも含め、イメージができあがっているところに、「そう思う理由は？」と聞かれても、多くの子がうまく理由を見つけられずに困っている様子が見られた。



この主発問を生かすなら、4コマの場面をもとに、まずは、「動作化」で読みを深化させてから、「どこで仲直りの気持ちになった?」「どこで、仲良しに戻った?」など、具体的に問いかけると、子どもたちの思考の流れに合って、もっと活発な意見が出されたのではないかと思う。本時では「動作化」をわりと後の方で行ったが、最初の方で行うとよかった。

○「個々の発言を生かす」「本文に立ち返る」手立て

本文の「あめがあがり、～」の情景描写に目を向けた子がいた。素晴らしい意見であったのにもかかわらず、軽く流してしまい惜しいことをした。このような鋭い気付きは必ず評価し、プロジェクターなどを使って、本文を全員で確認するとよかった。

物語文では、子どもたちの読みを深めるために本文に立ち返ることが肝要である。また、教師のとり上げ方で一人一人の意見を最大限に生かすこともできれば、逆に子どもが学ぶ意欲を高める大きなチャンスを逃してしまうことを痛感した。



自分の考えと友達の考えを比べながら、考えを伝え合う授業

第2学年 実践記録

平成25年11月6日(水)3限 大久保 彩香

1 単元名 音読劇をしよう
教材「お手紙」(全12時間)

2 本時の計画 (7/12時間目)

(1) 本時のねらい

- 根拠や理由をもって「かたつむりくん」にお手紙を届けるのを頼んだことの是非を考え、互いに自分の考えを伝え合うことができる。

(2) 本時の構想

「お手紙」は、友達の不幸と一緒に悲しみ、幸せを共に喜ぶほのぼのとした心情を描いた作品である。4の場面では、4日遅れの、しかも内容の分かっている「お手紙」を、仲良く持つ「がまくん」と「かえるくん」の姿が描かれている。「かたつむりくん」が手紙を届けるのに時間がかかったことよって、「かえるくん」は手紙を出したことや手紙の内容を告白する。それにより「がまくん」の心が開き、より一層二人の友情が深まっていく。しかし、初発の感想では、「がまくん」のもとにお手紙が届くまでに4日もかかっていることから、「かたつむりくん」を否定的に捉える児童や、なぜ「かたつむりくん」に頼んだのか疑問に感じる児童もいた。

そこで、本時では、「かたつむりくん」にお手紙を届けるのを頼んだことの是非について考えさせる。自分の立場を明確にした上で、そう考えた根拠や理由(説明)も考えさせて書かせる。その後、互いに自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりする活動を行う。

3 本時の展開 (7/12時間)

時	児童の主な活動	◇支援 ・留意点 ◎評価
5	1 教材文を音読する。	・全員で丸読みをする。
3	2 場面の読み取りをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">かたつむりくんにお手紙をたのんだのは、よかったか、よくなかったか。</div>	
10	3 自分の考えとその根拠や理由を書く。	◇自分が選んだ考えに、ネームプレートを貼らせて、立場をはっきりさせる。 ◇赤白帽子を用いて「良かった」という考えの人は白、「良くなかった」という考えの人は赤をかぶらせる。 ◇ノートを持って席を移動し、友達と根拠や理由を話させる。 ◇少数の意見から発表を始め、同じ意見、ちがう意見、質問や反論の流れで進める。 ◎自分の考えを書く。 A: 友達の意見を聞いて思ったことや分かったことを入れて書いている。 B: 自分の考えと根拠や理由を書いている。 C: 書けない。
5	4 ペアで伝え合う。	
15	5 全体で伝え合う。	
7	6 授業を振り返る。	

4 考察

(1) 成果

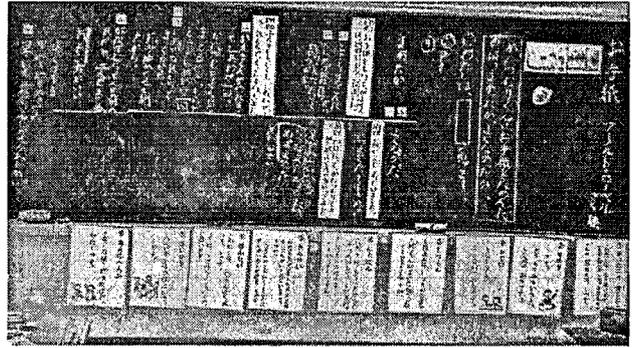
○「自分の考えをもつ」における児童の様子

今回は、物語の中で児童が疑問に感じていた部分を取り上げ、かたつむりくんにお手紙を頼んだのは、「良かった」、「良くなかった」という2択になる発問をした。

課題に対する「自分の考え」を、「根拠」と「理由」に分けてノートに書かせた後、ネームプレートを貼って、自分の立場を明確にしてから発表にうつった。

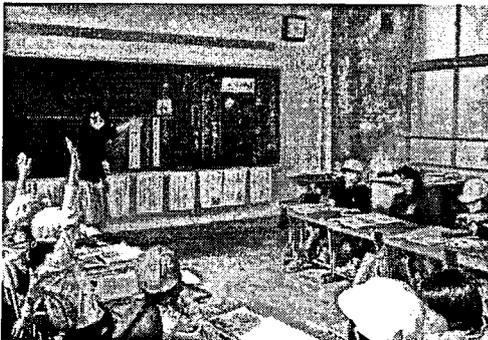
1学期の「スイミー」の研究授業では、根拠や理由を書かせる前に、ネームプレートを貼らせたため、自分の考えに自信の持てない児童は、他の児童がネームプレートを貼る様子を見て、直前で考えを変え、全員が同じ考えになってしまった。今回は、自分の考えを書いてから立場を明確にしたことによって、一人一人が自分の考えをしっかりともつことができた。12名中11名が、自分の考えを「根拠」と「理由」に分けて書くことができた。

また、2学期から、「松長まなBOOK」の話すスキルに加え、①思ったこと・感じたこと、②理由、③仮定、④質問、⑤確認、⑥賛成、⑦反対、⑧補充、⑨考えの変化の話型を教室に掲示した。特に2学期は、自分の考えの理由の一つとして「もし～なら、～(ない)です。」という仮定の話型を用いて書いたり話したりする活動を、授業や朝の会のスピーチなどで多く取り入れてきた。そのため、今回の研究授業でも、課題に対して、「かたつむりくんに頼んでいなければどうだっただろう。」と考え、理由の一つとしてノートに書く児童もいた。



○「伝え合い」における児童の様子

初めに、ペアで話す場を設けてから、机を「コの字型」に変えて全体での発表を行った。全体発表では、1学期から話型を用いて話し合いを行ってきたことや、ネームプレートの下に児童の挙げた根拠や理由を用いて板書したことで、児童は自分



の考えと友達の考えの相違を比べながら話すことができた。



また、ペアや全体での話す場だけでなく、自分の考えを書く場面でも、隣同士や前後の児童で相談し合ったり、自分の考えを話し合ったり、自然と伝え合う姿が見られた。平山指導主事から、「自分の考えをもつことは大切だが、それがたった一人で考える時間ではない」とご指導いただいた。様々な場面で、児童同士の伝え合いを大切にしていきたい。

(2) 課題

○自分の考えを「根拠」と「理由」に分けて書くことについて

1学期からの取り組みによって、課題に対して、どの子も、自分なりに本文から「根拠」を求め、自分なりに「理由」を書いて自分の考えをもてるようになってきた。それにより、全体での発表の場では、多様な考えが出され、話し合いの質が向上してきた。しかし、その一方で、課題からずれていたたり、根拠と対応していなかったり、意味が伝わらなかつたりするなど、理由を書くことに難しさを感じる児童もいる。そのような児童に対してどのような働きかけをしていくかが今後の課題である。

○教師の授業での役割「聴く」「つなぐ」「もどす」について

全体での発表の場では、少数の意見の児童から発表させ、同じ意見、違う意見の順で発表させていった。このとき、児童が発表したことを、担任が解釈しながら板書するという単調な繰り返しが続いていたため、聞いているだけの児童は集中力が途切れ、話し合いも徐々に停滞していった。教師と児童の1対1の授業ではなく、教師として、「聴く」、「つなぐ」、「もどす」を意識しながら、児童同士のつながりがもてるような授業を展開していきたい。

読み取りの焦点化で、考えを交流させる授業

第3学年 実践記録

平成25年10月21日(月) 2限

小出 誠

1 単元名 組み立てを考えて物語を書こう
教材「三年とうげ」

2 本時の計画 (3/6時間目)

(1) 本時のねらい

○3年とうげの様子を読み取る。(読む)

(2) 本時の構想

教材文「三年とうげ」は、テンポの良さを生かしながら語り継がれる民話的、とんち話的な物語文である。話の展開も典型的な起承転結でわかりやすい。テンポよく進む話の中で、トルトリの話聞いて、落胆していたおじいさんが不安に思いながらも希望をもつ様子や気持ちの変化、三年とうげで転びながらどんどん元気になっていくおじいさんの様子や気持ちの変化を読み取らせ、心情に迫らせる。そのため、正確に教材文を読み取らせ、教材文から引用できるよう課題や発問の設定に留意する。

伝え合うための手立て

① 教材文の載っているところにサイドラインを引かせる。

② 考えをもった時、その考えの根拠が何かを確かめるようにする。

根拠や理由を話すことで、自信をもって話すことができる。また、意見や感想の交流をするとき、お互いの意見が理解できるように出所を確かめる必要がある。

3 本時の展開 (3/6時間目)

時	児童の主な活動	○支援 ☆留意点 □評価
8	1 教材文を音読する。	
7	2 場面の読み取りをする。 三年とうげとは、どんな山ですか。	
	指示 1: A, B, Cから一つ、選んでノートに書きなさい。	○人数を確認する。
	指示 2: そう考えた理由を書きなさい。	○理由を発表させる。叙述から答えを見つけることを強調する。
15	発問 1: おじいさんが腰を下ろしたのは、どの辺ですか。	
	指示 3: 印を付けなさい。	○●印を付けさせる。 板書させ、全体の傾向をつかむ。
	指示 4: そう考えた理由を書きなさい。	○理由を発表させる。叙述から答えを見つけさせる。
	答え・・・となり村側の一番高いところ辺り。 ようやく、とうげにたどりついたところ。	
10	発問 2: 「三年とうげで転んだならば 三年きりしか生きられぬ。」ことを知っていたのに、なぜ、おじいさんは三年とうげを通ったのですか。	○この発問の解は叙述されていない。従って、理由を付けて答えを書けば、全て認める。
5	指示 5: ノートに書きなさい。 3 本時のふりかえりをする。	□3年とうげの様子を読み取ることができたか。【ノート】

4 考察

(1) 成果

○三年とうげの様子が記述されている部分を探す。

本時では、物語の発端となる三年とうげについて記述された部分を探していった。これらの叙述を根拠として、舞台としての三年とうげについて正確に読み取らせるためであった。

まず、三年とうげを簡略化した図にして提示した。三年とうげのイメージを可視化してつかみやすくするためである。それにより、子どもたちは、教材文中の「なだらかな」とうげの様子について読み取ることができた。

○発問「おじいさんがこしを下したのはどのあたりか」について、話し合う。

はじめに、図の中で自分の考えたおじいさんが腰を下ろした場所に印をつけさせた。そして、教材文から根拠となる個所に傍線を引かせ、その叙述をもとに班でおじいさんの腰を下ろした場所について話し合わせた。班の中では、子どもたちが、自分が書き込んだプリントや教科書の線を引いた個所を相手に示しながら、自分の意見を述べる姿が見られた。教材文の記述をもとに意見を述べていたのである。共通の図をもとに、おじいさんが腰を下ろした場合について話し合ったので、友達の考えや根拠を比較しながら検討することが容易となり、活発な様子であった。お互いの意見をしっかり聞き合うことにより、納得して班の意見をまとめることができた。



(2) 課題

○三年とうげの様子が記述されている部分を探す。

三年とうげの様子が記述されている部分を教材文から抜き出して発表する課題では、子どもたちはきちんと見つけることができている。発表でも、「〇〇ページ、□行目。」と根拠としての教材文の場所をきちんと述べながら、発言できていた。

今回の授業のテーマは、「読み取りの焦点化で、考えを交流させる授業」と設定した。その観点からみると、子どもたちの話し合いは、意欲的になされていた。

しかし、班の中での話し合いは、相手の話を聞こうとする意識が弱い。規則を守っての話し合いではなく、自分の言いたいことをただ伝えるだけという様子も見られた。班での話し合いの規則を徹底させて、自分の考えだけでなく他者の意見を聞き、比較してより良い意見にするという考え方を子どもたちに徹底させたい。



○本時のふりかえりの意見を交流させる。

本時の子どもたちは活発に意見を述べていた。子どもから出された意見が長い場合、どこまでを取り上げ、どこを切るかについて判断があいまいで、要領を得ないこともあった。各班の意見をまとめ、全員が納得する「おじいさんが腰を下ろした」地点を時間内に特定できなかった。時間配分の検討が不十分だった。お互いの考えを伝え合い、知り合うためにも、本時のふりかえりを交流させる場面を持つようにする。

自分の考えと友だちの考えを比べながら、考えを伝え合う授業

第4学年 実践記録

平成25年10月21日(月) 3限 水澤 恵美

1 単元名 読んで考えたことを話し合おう
教材「ごんぎつね」(全14時間)

2 本時の計画 (10/14時間目)

(1) 本時のねらい

○ごんのつぐないの中で、兵十への思いが最も強く表れているものとそう考えた根拠や理由を書き、互いに自分の考えを伝え合うことができる。

(2) 本時の構想

「ごんぎつね」は、いたずらばかりしているきつね「ごん」が、兵十とかかわることによって、少しずつ行動や気持ちを変容させていく物語である。ごんの兵十への思いは、初めはちょっとした気持ちでやったいたずらへのつぐないの思いであったが、つぐないを重ねるにつれて、自分と同じ一人ぼっちの境遇の兵十に近づきたいという思いへと変容していく。本文を読み取る中で、そういったごんの行動や気持ちの変容に気づかせたいと考えた。

そこで、前時で、ごんが兵十にしたつぐないを挙げさせる。そして本時では、まず、出された「ごんのつぐない」の中から、兵十への思いが最も強く表れているものを選ばせて書かせる。次に、そう考えた根拠や理由(説明)も考えて書かせる。その後、互いに自分の考えを伝えたり、友だちの考えを聞いたりする活動を行う。

根拠や理由を書く時には、自分とは違う立場の考えに対して「～～だから、これは違うと思う。」という反論を書く活動も取り入れていきたい。また、伝え合いの時には、読み取ったことを仮定して話すことができるように、「もし○○ならば、～～だと考えられる。」という話型も使うよう促す。

3 本時の展開 (10/14時間)

時	児童の主な活動	◇支援 ・留意点 ◎評価
7	1 教材文を音読する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">ごんのつぐないの中で、 兵十への思いが一番強いのはどれか。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・全員で丸読みをする。 ・前時の振り返りを行う。出されたつぐないは、短冊にして提示する。
10	2 自分の考えとその根拠や理由を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ◇自分が選んだ考えに、ネームプレートを貼らせて、立場をはっきりさせる。 ◇自分の考えに対する根拠や理由が書けた子には、自分とは違う立場の考えに対して反論を書くことを促す。 ◇ノートを持って席を移動し、友だちと根拠や理由など話させる。
20	3 伝え合いをする。	<ul style="list-style-type: none"> ◇少数の意見から発表を始め、同じ意見→違う意見→質問や反論の流れで進める。 ◇話し合いが停滞した時は、補助質問を出す。「ごんの兵十への思いの強さは、ずっと同じですか。」
8	4 授業の振り返りを書いて、発表する。 「兵十への思いが一番強いつぐないは、～～だと思う。○○さんが～～だと言っていたから(けれど)、□□だと思うから、一番強いのは～～だと思う。」	<ul style="list-style-type: none"> ◎自分の考えを書く。 A: 納得できた友だちの考えや根拠、理由などを入れて書いている。 B: 自分の考えと根拠や理由を書いている。 C: 書けない。

4 考察

(1) 成果

○「自分の考えをもつ」における児童の様子

今回は、課題に対する「自分の考え」を選ばせ、ネームプレートを貼って自分の立場をはっきりさせてから、「根拠や理由」をノートに書かせていった。

1学期から、「自分の考え」を書き、その後で「根拠」と「理由」を分けて書く活動を行っている。この形式に慣れ、どの子も根拠と理由を書けるようにはなっている。ただ、理由の「解釈」の部分は、内容にまだ個人差がある。今後も理由の書かせ方を指導していく必要があることを今回の授業からも改めて感じた。



○「伝え合い」における児童の様子



初めに、同じ考えの人同士で話す場を設けてから、「会議スタイル」に変えて、全体で自分の考えを発表する場とした。この時、少数の意見の児童から発表させ、同じ意見、違う意見、質問や反論の順で発表させていった。小林指導主事から、本時は初めから「会議スタイル」の方がよかったのではないかと、というご指導をいただいた。

「全員が全体で自分の考えを発表すること」、「話型を使って話すこと」についても、1学期から継続して行っているため、1学期よりも積極的に話す姿が見られた。

また、「伝え合い」の中で、他の児童の考えを聞いて、初めの自分の考えを変えた児童もいた。その際に、しっかりとした根拠をもって自分の考えを変える姿が見られた。

(2) 課題

○「発問」と「手立て」について

「発問の吟味・蓄積」に重点を置いて校内研修を進めているが、小林指導主事から、本時の発問は難しかったというご指導をいただいた。本時の発問は、根拠や理由に主観が入りやすく客観性が薄いので、なかなか「納得解」に辿り着けないとのことだった。

本時は、ごんが兵十に行ったつぐないを短冊に書き、掲示した。児童にとって見やすく、考えやすい手立てではあったが、児童は短冊の記述部分の言葉にだけ着目して、根拠を求めようとしていたので、思考が限定されてしまった。物語文は、ある一つの場面、ある一文や一つの言葉だけを根拠にするのではなく、思考を広げるためには、やはり本文全体に立ち返って根拠を求めることが重要になってくることを改めて感じた。

そのためには、次の手立てがあるとよかったのではないかと考えた。

①音読を早い時期から始めるなどして、本文をもっと読みこなすこと。

→どんなに長い文章であっても、教科書を開くかなくても『どこに、何が書いてあるか』が分かる・言えるようになるまで音読をすることにより、短冊の前後の表現についても意識した考えをもつことができる。

②プロジェクターを活用するなどして、本文全体に立ち返ることができるよう工夫すること。

③ごんがそれぞれのつぐないを行った時、あるいはつぐないを行う前後の「ごんの行動や気持ち」、「兵十への思い」を本時で振り返らせること。

○「反論の書かせ方」と「仮定の話型」について

1学期からの取組で、自分の考えに対する根拠と理由は書けるようになってきている。しかし、「～～だから、これは違うと思う」という相手の意見に対する反論や「もし〇〇ならば、～～だと考えられる」という仮定を加えることにより、自分の考えにより説得力が生まれてくるし、話し合いも活性化される。これらを普段のスピーチでも使うなどして、「伝え合い」の中で活用できるようにしていくことが今後の課題である。

最後に、本単元において児童の話し合いが活性化した発問をいくつか紹介する。

- ◇「ごんは、だれのどの言葉を聞いて『こいつはつまらないな。』と思ったか。」
- ◇「兵十に、『ごんの気持ちが届いた』と分かる一文はどれか。」

自分の考えと友達の考えを比較し、考えを伝え合う授業

第5学年 実践記録

平成25年12月5日(木) 5限 亀倉 こずえ

1 単元名 物語を読んで、自分の考えをまとめよう。
教材「わらぐつの中の神様」(全8時間)

2 本時の計画(7/8時間目)

(1) 本時のねらい

○マサエが変容したことが分かる文を見つけ、話し合いを通じて自分の考えを書くことができる。

(2) 本時の構想

「わらぐつの中の神様」は、わらぐつや神様に対して「みったぐない」「そんなの迷信でしょ」と言っていたマサエが、おみつさんと大工さんの考え方に触れることで、価値観や考え方を変容させていく展開となっている。

本時では、マサエの心情や考えが初めと比べてどのように変容したかを考えさせたい。そのために、「マサエの気持ちが一番大きく変わったのはどこか」について、その変容が分かる叙述(「根拠」)を探し、自分なりの解釈(「理由」)について話し合う。マサエの気持ちが変容したことが分かる箇所は複数あるが、「最も大きく変わったところ」と問うことで、物語の主題と深く関わる「神様」や祖父母に対する見方が変容した箇所だということが話し合いを通して意識できると考える。

また、本単元では、物語の特色「構成」「人物像」「表現」から物語を読み取ることもねらわれている。「現在—過去—現在」という構成は、過去の話の重要な要素が現在も続いていることを印象づける働きがあり、おみつさんがおばあちゃんだったという謎解きのような面白さを生んだり、マサエの心の変容を際立たせたりするという効果を生んでいる。したがって、本時でこのクライマックス部分に着目しながら読み取ることは、「構成」「表現」の仕掛けや面白さに気付くことができ、物語をより面白く味わうことができるということを次時に学ばせられるようにしたい。

3 本時の展開

時間	教師の働きかけと児童の反応	○支援 ☆留意点 □評価
5 3	T 音読(マル読み) <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">マサエの気持ちが一番大きく変わったところはどこか。</div> ①マサエが、目をくりくりさせて聞きました。 ②マサエは手をパチンとたたいて、目をかがやかせました。 ③「ふうん。だけど、おじいちゃんがおばあちゃんのために、せつせと働いて買ってくれたんだから、この雪げたの中にも、神様がいるかもしれないね。」 ④マサエは赤いつま皮の雪げたをかかえたまま、「おかえんなさあい。」とさげんで、げんかんへ飛び出していきました。	○支援 ☆留意点 □評価 ☆伝え合いの時間を確保するため、前時に変容が分かる文(根拠)は書かせておく。 ○理由を書く前にネームプレートを貼り、立場を明確にさせる。
5	T なぜ、その文を選んだのか、理由を書きましょう。	○自分の意見に自信が持てない児童もいるので、友達の見聞き合う相談タイムを設ける。
2	T 同じ立場の人と話して理由を増やしたり、違う立場の人と話して反論材料を集めたりしましょう。(2分間)	☆コの字型で話し合う。
20	T 全員で話し合いましょう。 (補助発問) マサエは初めと違って何が分かったのですか。	○話し合いが膠着した時は、①②、③④と分けて討論。その後、③と④を検討する。
10	T まとめを書きましょう。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ぼくは、だと思ふ。 なぜなら、～(理由)。 A納得 それに、○○さんの考えにも納得できる。なぜなら～。 B反論 だから、○○さんの考えには納得できない。なぜなら～。 C納得+反論 たしかに、○○さんの考えの～ところには納得できる。 しかし、～(反論) このように、～からだと思ふ。</div>	○まとめの書き方を提示する。 A, B, Cのパターンから、自分の書きやすい型を選択する。 ☆書き終わった児童から発表させる。

4 成果と課題

(1) 成果

○話し合いの時間の確保

これまでの様子から、読みを深めるためには話し合いの時間を20分は確保する必要があると感じた。また、話し合いを通じて、自分の考えの変容をノートにまとめる時間も確保する時間を作りたかった。そこで、主発問に対する根拠は前時に書いておき、本時ではそれをネームプレートで簡単に確認して理由を書かせることで、話し合いの時間を確保するようにした。



こうしたことで、全員が発言する十分な時間が確保できた。教師側にとっても、根拠をどこにしたか、同じ立場の子が何人いるか、どのような主張で話し合いに臨もうとしているか事前に把握することができ、人間関係なども考慮してどう話し合いを進めればよいのか見えてくるので有効だと感じた。

○話し合いの収束

主発問「マサエの気持ちが大きく変わったのはどこか」を話し合うことで、主人公の心情や価値観がどのように変容したのか気付かせたいと考えた。児童が挙げた根拠は、以下の5つ。

- ①マサエが、目をくりくりさせて聞きました。(2名→0名)
- ②「ふうん。じゃあ、おみつさん、幸せにくらしたんだね。」(2名)
- ③「うん。おばあちゃんの名前は、山田ミツ。ーあっ。」(2名)
- ④「おみつさんて、それじゃ、おばあちゃんのことだったの。〜。」(7名)
- ⑤「ふうん。だけど、おじいちゃんがおばあちゃんのために、〜。」(8名)



話し合いを進めると、それぞれの主張をまとめる子が出てきた。

- ②おばあちゃんが幸せになった話
- ③④おみつさん＝おばあちゃん、大工さん＝おじいちゃん、ということが分かってびっくりした話
- ⑤神様がいるかもしれないという話

さらに、2つに分けるように促すと、以下の理由から2択に絞って話し合いを進めることができた。

- ②③④は、おばあちゃんとおじいちゃんについてのこと(最終結論9名)
- ⑤は、神様についてのこと(最終結論10名)

次時では「マサエにとってより重要な変化はどちらか」を問い、初めの価値観と比べて⑤の方がより重要な変化だということで全員一致の結論に至った。本単元を通じた話し合いの様子から、焦点化された話し合いを進めるためには、以下のような手順を子どもたち自身がとれるようにするとよいと感じた。

似ている選択肢をまとめる → それぞれの主張をまとめる → 心情の質、場面などで2択に分ける
→ より重要な変化を問う

○話し合いが見える板書

授業の終末で、話し合いを活かしたまとめを書くためには、誰がどのような意見を出したか分かる板書にする必要がある。これまで反論は、チョークの色を変えて意見の横に書き加えていたが分かりづらさが残っていた。そこで、黒板の下半分に反論を書き、矢印でどの意見に対するものか示すようにした。論点が見えやすくなり、子ども達にも好評だった。



(2) 課題

子どもたちは全員が積極的に指名なし発言ができ、話し合いを楽しんでいる様子がみられる。しかし、自分の考えに固執しすぎる傾向もある。友達のを聞いて迷う姿を賞賛しながら、友達の考えに揺さぶられたり、良さを受け入れたりしながら自分の考えをつくる楽しさをもっと味わわせたい。また、話し合いの中で、子どもたち自身で主張をまとめたり、論点が何かを気づいたりしていけるようにしたい。

叙述や経験をもとに、考えを伝え合う授業

第6学年 実践記録

平成25年11月20日(水) 5限 落合 義貴

1 単元(題材名) 作品の世界を深く味わおう
教材「やまなし」

2 単元の目標

- 場面についての描写をとらえ、作品の中で使われている表現を味わいながら、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。
- 目的に応じて、複数の本や文章を比べて読み、効果的な読み方を工夫することができる。
- 作品の中で使われている表現を味わい、五感や言葉の使い方に関心をもつことができる。

3 単元と児童

(1) 単元について

学習指導要領(国語)C 読むこと ② 内容

エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。

【解説編】

「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえる」とは、物語などを読むときの中心となる登場人物について、その相互関係をとらえ、それらに基づいて心情や場面の描写をとらえることである。

・・・高学年では、登場人物の相互関係から人物像やその役割をとらえ、そのことによって、内面にある深い心情も合わせてとらえることにつないでいく。登場人物の心情は、直接的に描写されている場合もあるが、登場人物相互の関係に基づいた行動や会話、情景などを通して暗示的に表現されている場合もある。このような表現の仕方にも注意し、想像を豊かにしながら、読むことが大切になる。

「優れた叙述について自分の考えをまとめる」とは、場面の展開に沿って読みながら、感動やユーモア、安らぎなどを生み出す優れた叙述に着目して自分の考えをまとめることである。象徴性や暗示性の高い表現や内容、メッセージや題材を強く意識させる表現や内容などに気付き、それらを評価したり、自分の表現に生かしたり、感想文や解説文などにまとめたりしていくことになる。

以上のことから、物語文の学習の最終的な目標は、叙述されている表現や内容から自分の考えをまとめていくことである。

(2) 児童の実態(男子3名 女子5名 計8名)

① 作者、宮沢賢治について

宮沢賢治について、知っていることを尋ねてみた。昨年度、図工で「銀河鉄道の夜」をテーマに絵画を描いたことを思い出していた。しかし、これまでに本を読んだことのある児童は0人だった。

② 全国学力調査から

4月に実施された全国学力調査国語Bの結果である。

設 問	正答率	全 国
複数の内容を関係付けた上で、自分の考えを具体的に書く	25.0	17.8
「本間さんが書いた推薦文」において推薦している理由を書く	37.5	44.6

全国的にも低い数値ではあるが、いくつか提示されている情報から必要な情報を取り出し、自分の考えをまとめることが不十分である。

また、理由を書く設問では7ポイント下回っている。ここでは「本間さんが書いた推薦文」の理由が求められており、やはり、必要な情報を取り出して記入する力が不足している。

国語の物語文では、段落ごとの読み取りに加え、物語全体を通して考え、必要な情報を見付け、自分の考えを結びつけていく取組が必要である。

③ 自分の考えを伝え合うことについて

子どもたちは、話し合いを上手にしたいという願いを持っている。話し合いがうまくいかないときは、「今日はだめだったね。」と振り返ることもある。自分の考えをノートに書き、それを基に全員が発表することができる。

発表には、「〇〇さんと同じで…」「〇〇さんと似ていて…」と同意や付け足しの意見は続くが、反対意見には消極的な面がある。学級の間関係が影響していることも考えられる。一人一人が自分の考えを主張できる強さをもたせていく必要がある。

4 単元の構想

(1) 研究主題にかかわって

◇研究主題

根拠を基に考えを伝え合い、表現力を高める子どもの育成

◇目指す子どもの姿

文章の表現をもとに考えを伝え合うことができる子ども
高学年：自分の考えと友達のを比べながら話し、友達と交流し高め合う子ども

考えを交流するには、「話すスキル」「聞くスキル」を活用していく。さらに、次のようなスキルを提示し、自分たちで話をつなげていきやすい環境をつくる。

- ① 〇〇さんはどう思いますか。
- ② 〇〇の人はどう思いますか。
- ③ 〇〇さん以外の人はどう思いますか。
- ④ 意見が出ないので、話題を変えていいですか。
- ⑤ 〇〇さんの意見をもう一度言ってください。
- ⑥ ちょっと待ってください。
- ⑦ どこにあるのですか。
- ⑧ 話がずれているので、ちゃんと言ってください。

- ⑨ 堂々巡りなので、この話はやめませんか。
- ⑩ ○○さんは、○○ということでもいいですか。

これらを掲示し、国語の時間だけでなく、他の学習の場面でも活用しながら使いこなしていけるようにする。

(2) 具体的な手だて

①分析批評による読み取り

「やまなし」は宮沢賢治の心象風景を描いた作品である。最愛の妹トシを無くし、その死と生をモチーフに表現したと言われている。学習指導要領に述べられている「象徴性や暗示性の高い表現や内容、メッセージや題材を強く意識させる表現や内容などに気付く」

には、分析批評が有効である。

分析批評とは、表現分析を中心とした総合的な批評の方法である。話者・対比・イメージ・起承転結・伏線・クライマックス・視点・類比・色調・象徴・中心人物・ピナクル・登場人物・比喻・モチーフ・題材・主題・事件(エピソード)などの観点から叙述に基づいて検討を行い、理解や感動を深めることが期待できる。

②分析批評の習熟を図る既習単元の設定

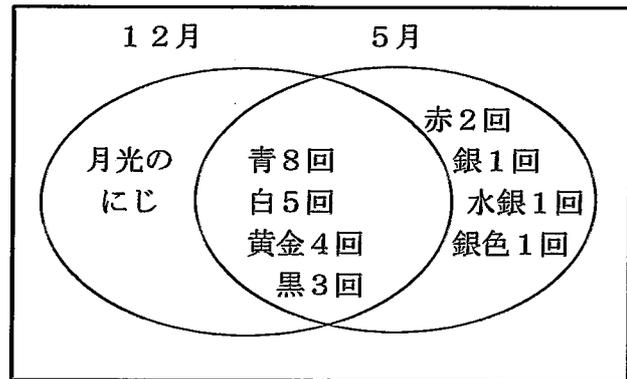
単元に入る前に2年生の物語文「スイミー」を題材に、分析批評における観点の習熟を図る。「スイミー」は、スイミーとまぐろ、スイミーと仲間の魚の対比や、スイミーの色と他の仲間の色など、「やまなし」で扱いたいと考えている2つの観点の習熟を図ることが期待できる。

③宮沢賢治の生い立ちの学習

「やまなし」が宮沢賢治の心象風景であれば、宮沢賢治の生い立ちや考え方を理解することが、読み取りを深めることにつながる。教科書には、「やまなし」のあとに宮沢賢治の伝記を扱っているが、ここでは、「やまなし」の学習の前に宮沢賢治について扱い、理解を深めておくようにする。

④「対比」を中心に検討することを通じた思考力・表現力の育成

「やまなし」は、「対比」と「色調」を取り上げる。「5月」と「12月」の対比を様々に出させ、一番重要な対比を検討させる。どの主張も認めながら友達の考えと交流する楽しさを体験させる。次に、収束した対比が何を象徴しているか考える。これも様々な考えを交流させる。最後に象徴を表している色を検討させる。「やまなし」には多くの色が登場する。ベン図で表すと右のようになる。



色のイメージを検討させながら、叙述された表現から、自分の考えを發表したり、意見を交換したりする学習を通して、思考力や表現力の育成を図る。

5 指導計画

次	時	主な学習活動	○備考
1	1・2	・スイミーを解釈する。 「登場人物」「主人公」「対比」「色」 ・「スイミーが目になろうと考えたのはいつか」 について話し合う。	・話すスキルを確認する。
2	3	・宮沢賢治の生き方・考え方を学ぶ。	・プレゼンを作成し、妹トシについても触れるようにする。
3	4・5 6 7 8 9 10 11 12	・音読 ・意味調べ ・「クラムボン」とは何か。 ・「イサド」とはどんなところか。 ・「5月」と「12月」で対比されているものは何か。 ・一番大切な対比は何か。 ・「5月」と「12月」は生死のどちらを表しているのか。 ・生死を表している色は何色か。 ・「やまなし」は何を表しているのか。	・「やまなし」を解釈させる。 ・家庭学習とリンクさせ、授業の振り返りをさせる。

6 本時のねらい（10時間目）

(1) ねらい

○生死の対比について、文章を根拠に理由を書くことができる。

(2) 本時の構想

この作品全体が「5月」対「12月」という対比の形で表されている。そこで、何と何が対比されているかを考えさせ、多くの対比を出させる。かわせみとやまなし、かわせみとかぼのはな、白と黄金などが出されるだろう。色の対比は後に扱うことを宣言して、出された対比の中で一番重要な対比はどれか根拠をもとに話し合わせる。話し合いの中から、「かわせみ」と「やまなし」に収束していくと思われる。どちらも川に飛び込んできたものだが、

かわせみ：魚を食べた 殺した こわいもの

やまなし：酒になる かにが喜ぶもの

など、話し合いを通してそれぞれの役割を考えさせる。その上で「かわせみ」と「やまなし」は何を象徴しているか対比させることにより、「生死」にかかわる考えに気付かせていく。

「5月」↔「12月」は「生」↔「死」なのか、「死」↔「生」なのか、検討させていく。子どもから生死の対比が出ないときは、教師から提示する。

本時では話し合いを中心に進めるため、生死に関する自分の考えを前時までにノートにまとめておくようにする。

どちらの意見も肯定的に認めながら、「5月は魚にとっては『死』だが、かわせみにとっ

てはどうか。」と視点を変えて検討させる。賢治は日蓮宗の信者であった。「5月」「12月」のどちらにも生から死に、死が生につながる輪廻転生という仏の考えに触れるところまで考えを深めたい。

本文をプロジェクターでスクリーンに投影し、根拠として子どもが本文を述べたときに示せるようにする。

(3) 展開

時間	児童の主な活動	◇支援 ・留意点 ◎評価				
7 28 10	<p>1 教材文を音読する。</p> <p>2 生と死の対比について話し合う。</p> <div data-bbox="319 757 925 878" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>「5月・12月は生<=>死なのですか、それとも、死<=>生なのですか。」</p> </div> <p>①発表，討論をする。</p> <p>②5月の中に生死はないのか，12月の中にも生死はないのか検討する。</p> <p>3 授業のまとめを書く。</p> <p>「5月は〇〇であり，12月は□□である。</p> <p>なぜなら， 例えば， もし， したがって， 。」</p>	<p>・3分読み ・1人1文読み</p> <p>◇本文をプロジェクターで提示する。</p> <p>◇板書を視覚的にまとめる。</p> <div data-bbox="957 795 1380 1041" style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px dashed black; padding: 5px;">死</td> <td style="padding: 5px;">生五 月</td> </tr> <tr> <td style="border-top: 1px dashed black; border-right: 1px dashed black; padding: 5px;">生</td> <td style="border-top: 1px dashed black; padding: 5px;">死12 月</td> </tr> </table> </div> <p>◎自分の考えを書く</p> <p>A：友達の見解と比較して説明している。</p> <p>B：根拠+説明が書ける。</p> <p>C：書けない。</p>	死	生五 月	生	死12 月
死	生五 月					
生	死12 月					

7 考察

(1) 成果

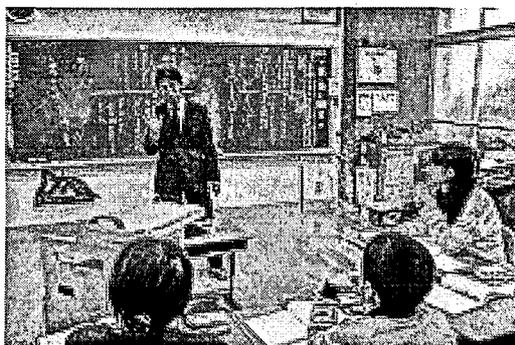
○「自分の考えをもつ」における児童の様子

本時の前に発問し、事前に考えをノートにまとめさせるようにした。これまで「対比」を中心に話し合いをしてきたことにより、子どもたちは「生」と「死」について、「5月」と「12月」、どちらの月になるのか考えやすかったようである。分析批評で読むこと、既習学習の活用、指導計画などの手だてが有効であったと言える。

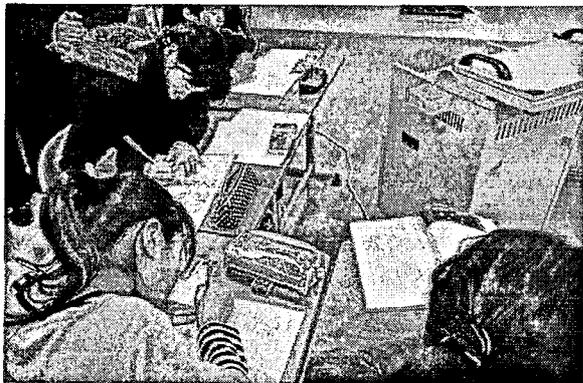
また、書く量を1ページと目標を定めて取り組んできた。子どもにも合格ラインの量を示し、とにかく書くことを意識づけた。そのための「考え・根拠・理由」の「型」は、子どもたちにとって書きやすかった。

○「伝え合い」における児童の様子

子どもたちは、ノートに書いてある自分の考えを全員発表することができた。その後、質問や反論を促したが、話し合いが子ども同士では進まなかった。そこで、教師から5月のかわせみは死なのか、生なのかを問うた。すると、かわせみが魚を食べることは生きることになる、魚にとっては死になるという意見の関わり合いが生まれてきた。同様にやまなしについても考えることで、視点を変えると一方では死でも、一方では生になることがわかってきた。



最後に「かにながやまなしを食べることと、かわせみが魚を食べることは同じと考えてよいか」を考えさせ、話し合った。「生き物」を食べることと「食べ物」を食べることは違う、「食べる」ことは同じと考えるなど、言葉が意味することを伝え合うようになった。



「松長まなBOOK」の話すスキルや今回提示したつなぎのスキルを子どもたちは、伝え合いで活用する場面が見られた。「型」を用意することは、「伝え合い」を活性化する手だてとして有効であった。

(2) 課題

本時では、ねらっていた命のつながりまではたどり着くことができなかつた。次の時間に、まとめを交流させる中で、弱肉強食や自然死などねらいに関連する言葉が子どもの中から出てきた。1時間の中で、どのようにして子どもに考えを表出させるか、授業の組立や構成などが課題となった。

尚、本授業以外に伝え合いが活性化した発問は次の通りである。

- ◇ クラムボンとは何か。
- ◇ 「5月」と「12月」の対比の中で一番大切な対比は何か。
- ◇ 「かわせみ」と「やまなし」の対比は何を表しているか。
- ◇ 会話は、どれが兄でどれが弟か。

第3学年 社会科実践記録

平成26年2月26日(水) 4限

長谷川 玲子

1 単元名 「もっと知りたい みんなのまち」

2 本時の計画

(1) 本時のねらい

自分で地図記号を作ることを通して、地図記号の成り立ちを考えることができる。

(2) 本時の構想

自分たちの住む地域について調べていくなかで、地図は必ず使う資料である。地図記号には、子どもの意見が採用されて新たに作られたものや、まだ統一された記号のない施設や土地の用途などがある。地図記号は、簡単に描ける・形から意味がわかるなどの要素が大事であることを「地図記号づくり」を通してとらえさせたい。

3 本時の展開

時間	教師の働きかけと予想される児童の反応	◇支援 ・留意点 ◎評価
3 5	1 フラッシュカード 2 「形」からできた地図記号があることを知る。 ① これは、神社にあるものの形を表しています。それは何でしょう。 ・赤い門 ・鳥居 ② 畑の地図記号は、何の形をもとにつくられたのでしょうか。 ・くわの形 ・スコップの形 ・種の形	・テンポよく進める。 ・「神社の地図記号」を提示する。 ・「畑の地図記号」を提示する。 ・「〇〇の形」とノートに書かせる。
7	3 「文字」からできた地図記号があることを知る。 ③ なぜ、学校の地図記号は、漢字の「文」なのでしょう。 ・文字を書くから ・文を習うから	・「学校の地図記号」を提示する。 ・「郵便局の地図記号」を提示し、同じように「文字」からできていることを確認する。
30	4 新しい地図記号を考える。 ④ これは何の地図記号でしょうか。 ・老人ホーム。 ⑤ 公園の地図記号を考えましょう。 ⑥ 発表 ⑦ 自分の一番いいなと思ったものとその理由を書きましょう。 ⑧ 発表	・「老人ホームの地図記号」を提示する。 ・公園のイメージをもたせてから考えさせる。 ◇机間指導。「形」と「文字」から考えるように支援する。 ・書けた子から黒板に考えた地図記号を板書させる。 ・板書した子からノートになぜその地図記号にしたか理由をノートに書かせる。 ◎自分で考えた地図記号を作ることができる。 A：公園を示す理由を付けて地図記号を作ることができる。 B：公園の地図記号を作ることができる。 C：作ることができない。

4 考察

(1) 成果

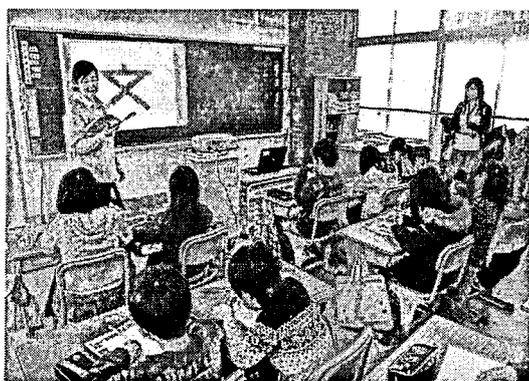
○フラッシュカードについて

学習指導要領（社会科）では、第3学年及び第4学年の内容として、主な地図記号を扱うものとしている。主な地図記号については、以下のように示されている。

身近な地域の様子を地図に表したり、地図から市の様子を読み取ったりする際に必要なものを扱うようにする。

絵地図づくりや市の様子について地図を活用して調べるなかで、地図記号を使ったり、読み取ったりできるようになってほしい。

そこで、地図記号を定着させるために、授業の始めにフラッシュカードを行うことにした。4月から社会科の時間は毎時間行っている。リズムカル

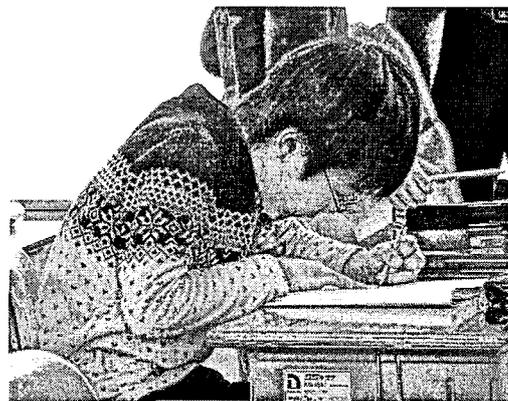


にテンポよくめくっていくことで、子どもたちに声を出させ、自然に授業に引き込むことができ、授業のスタートがスムーズに行うことができた。また、フラッシュカードを活用することで、地図記号についての知識を効果的に楽しく身に着けることができた。今回、①教師2回→子ども2回、②教師1回→子ども1回、③子どもだけ、の3つのパターンでカードを提示したが、他にも色々な提示の仕方があるので、今後授業のねらいなどによって色々なパターンでフラッシュカードを提示していけるようにしたい。

(2) 課題

○授業形態について

一斉指導がメインになってしまい、子ども同士の関わり合いが少なかったことが課題である。ペアやグループなどの授業形態を取り入れ、子どもたち同士の関わり合いをもっと増やしていくことで、考えを深めていきたい。



○記号の指導について

新しい地図記号を考える活動に入る前に、「老人ホーム」の地図記号を提示した。提示するだけでなく、なぜこの地図記号が選ばれたのか？考えさせることで、地図記号の見やすさや分かりやすさに視点を当てて考えさせる時間をとるべきであった。地図記号は、「見やすいこと」「分かりやすいこと」が大切であることをしっかりと意識させることで、新しい地図記号を作る活動に活かされてきたと考える。

